

野犬ですよ、野犬。五、六匹いましたかね。そら、焦りましたよ。登りで追いかけて来るから下るにも下れないし。——え？　めちやくちや踏みましたよ。今までで一番踏んだんじゃないですかね、レースより。だって命がけですよ？　ほんと——。

京都までのソロライドの途中、丹波の山奥で、数匹の野犬と遭遇した時のことをARさんは話した。

「跳びついて来たやつに、あとちよつとでココ！　噛まれるところでしたからね」

そう言っつて青いビブショーツのお尻を突き出すと、チームの皆はどつと笑った。話がウケたARさんは気を良くして立ち上がり、今度は身振りを交えて野犬からの逃走劇を語った。

「あん時の僕、カンチエにも負けてなかったと思いますよ」皆はまた笑った。

「せやけど、どうせまたグラベル入ったんちやうの？」

グラベルと呼ばれる荒れた野道を走るシクロクロスにも乗るARさんを揶揄って、ナゴナゴさんが言った。

「いや、オンロードですよ。犬にグラベルもロードも関係ないじゃないですかあ。あいつら山の中じゃ我が物顔でうろついていますから」

「ほんならARさんも野犬と一緒にやな。ロードでもグラベル入っていくやん」ドンチヤンさんがそう言うと、皆また笑った。

EVOさんに誘われて、私は彼のチームの盆休みライドに同行させてもらった。宝塚から加西まで、ぐるりと東廻りの一八〇キロのルート。日も傾き、宝塚の西谷サービセンターで最後の休憩を取りながら、私もチームの皆に交じって笑っていた。

EVOさんと最初に出会ったのもこの西谷のサービセンターだった。私がソロで篠山まで行った帰り、やはりここで最後の休憩をしていた時に声を掛けられた。

「——どこまでですか？」　平日に走っているロード乗りは、互いに目についた。

EVOさんはTTバイクにノースリーブのウェアで、肩から指の先まで真っ黒に焼けていた。フレーム、コンポを見て、いつもどの辺りを、どのくらい走るのか、なんてことを話し合いながら互いの実力を探る。そして相手が私など比較にならないほどの実力者であることがわかったが、それにも拘らず腰が低く、微笑を絶やさず、低音で話すEVOさんに、私はすつかり魅せられた。

そのまま長尾山トンネルの手前の別れ道まで、お互い先頭を交代しながら曳き合って走り、「また一緒にしましょう」とSNSのアカウントを交換して別れた。

ロードバイク乗り同士、擦れ違えば手を挙げて挨拶し、そうやってライドの途中で知り合って繋がりが広がっていくのは常だった。

神戸市北区の物流倉庫に勤務する私は、週末の保守工事の立ち合い等で、勤務は不規則だったが、「長い休みは世間と一緒にです」と言ったのをEVOさんはちゃんと憶えてくれていて、盆休みや正月などには、「もし都合が良ければ——」とわざわざ自身のチームのライドに私を誘ってくれた。ソロライドがほとんどの私には、そんなEVOさんの誘いがあった。

そうやって数回、彼と彼のチームとライドをして、毎週末のチーム朝練には参加できなかったが、すっかり私も準メンバーの一人となっていた。

ところが、私はEVOさんにしても、すっかり馴染みの他のメンバーにしても、知っているのはSNSのハンドルネームだけで、本名までは知らなかった。

「EVO」というハンドルネームのEVOさんは、平日も週末も走り、トライアスロンの大会に海外にまで遠征していた。仕事は「貿易関係のいろいろです」と言っていたが、それが勤めなのか自営業なのか、詳細は分からなかった。EVOさんのチームの仲間とも、SNSで繋がっているだけ

で、やはりそれぞれのハンドルネームしか知らなかった。ARさん、ナゴナゴさん、豆さん、ドンちゃんさん、SAITOさん。「SAITO」は本名なのだろうけれど、それが「斎藤」なのか、「齋藤」なのか、はたまた「才藤」なんていう変わり種であるのかも知れなかった。

しかしこれは、私の周辺に限ったことではなく、ロード乗り仲間には有りがちなことだった。互いの機材、フレームは勿論、コンポ、ホイール、峠のタイム、トレーニングアプリを通じて最大心拍数すら把握しているのに、肝心の氏名、職業については知らないことがある。

笑い話に、ライド中の落車で、メンバーの一人が意識不明に陥って、慌てて救急車を呼んだままでは良いが、駆け付けた救急隊員に怪我人の氏名を尋ねられ、誰も応えられなかった、なんていうことがある。そんなことから、ヘルメットの内側にIDカードを仕込んだり、兵士のようにドッグタグを首から提げたりするメンバーもいたが、わざわざそれを確認することも無かった。

「高見さんも何かアダ名ないんですか？」

ある時、EVOさんは私に訊いた。そう言われても私は適当な名前が思いつかず、チームの皆もいくつか案を出してくれたが、どの候補も結局は馴染まず、私はSNSのハンドルネームも、本名そのまま「高見」だった。

「いや、もうね、あれ犬ちゃいますよ。オオカミですよ。こおおんなん、いましたから！」

そういつて両腕を一杯に広げて、話を盛り上げるARさんは、元実業団の選手で、チームのエースでありながら、ムードメーカーでもあった。

「——S峠、気を付けてくださいよ。高見さんもよくひとりりで走るから」

少し遠くから話を聞いていた私の傍らにやって来て、腰を下ろしながらEVOさんは微笑んだ。